子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル：

Elective caesarean delivery at term and its effects on respiratory distress at birth in Japan: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル：

選択的帝王切開による満期出生と出生時呼吸障害との関係：子どもの健康と環境に関する全国調査

ユニットセンター（UC）等名： 甲信ユニットセンター

サブユニットセンター（SUC）名：

発表雑誌名：Health Science Report

年： 2021　　DOI： 10.1002/hsr2.421

筆頭著者名： 堀内　清華

所属 UC 名： 甲信ユニットセンター

目的：

満期早期出生（満期早産：在胎 37 週 0 日～38 週 6 日）は子どもの死亡や障害のリスクを上げることが報告されている。本研究では、日本における満期早産の実態を明らかにし、帝王切開により出生した子どもの中で、満期早産の影響を明らかにすることを目的とした。

方法：

エコチル調査参加者のうち、単胎で出生時の在胎週数の記録がある生産児を対象に、出生時の在胎週数と分娩方法を検討した。さらに、在胎週数 37 週から 41 週の選択的帝王切開での出生児に限定して、出生時の在胎週数と出生時呼吸障害との関連を解析した。出生時の在胎週数は、満期早期（37 週 0 日～38 週 6 日）、満期（39 週 0 日～40 周 6 日）、満期後期（41 週 0 日～41 週 6 日）に分類した。

結果：

100,011 人の対象児のうち、32,078 人 (32.1%)が満期早期出生であった。満期早期出生のうち、自然分娩が 44.0%、帝王切開が 39.2%（37 週、38 週それぞれ 49.7%、34.6%））であった。帝王切開で出生した満期早産児では、前回の出産が帝王切開であったことが最も多い理由となっていた（37 週、38 週それぞれ 51.5%、60.3%）。 選択的帝王切開で 37 週 0 日から 41 週 6 日に出生した 10,076 人のうち、満期早期での出生は、満期での出生と比べて、新生児の呼吸障害の発生頻度が約4倍となった (調整オッズ比： 4.19; 95%信頼区間, 1.70, 10.34)。

考察（研究の限界を含める）：

本研究で認められた満期早産の割合は 32.1% (2011-2013 年）であり、2010 年に報告された 30.8%から増加傾向がみられた。満期早産での自然分娩率は 44%と、米国の 53.6%と比較して低かった。本研究では、満期早期での帝王切開の適応理由として最も多く挙げられたのは帝王切開既往であり、医学的適応とは別に計画分娩が行われている可能性が示唆された。限られた周産期医療資源により緊急帝王切開に対応するのが困難であるという事情も一因と考えられる。ただし、本研究では、出産時の詳細な情報がなく、早期出産適応となる子宮破裂リスクについては検討できなかった。計画分娩の際には、満期早期出生による子どもの健康リスクも考慮する必要があると考えられた。

結論：

本研究は、日本国内における満期早産の実態を明らかにした初めての研究である。帝王切開出生児において、満期早期出生は、満期出生に比べて、出生時の呼吸障害リスクが高かった。日本の周産期医療の実情を考慮しつつも、早期出生適応のない選択的分娩時には、満期早期出生が子どもの健康に与える影響にも配慮が必要である。